

博士学位請求論文

「中国語における日本語借用語の通時的研究—社会科学用語を例として—」

要旨

戸谷将義

本論文は、一般言語学の借用の理論から日中近代新漢語研究の成果をとらえなおし、日中言語間の借用過程を改めて考察し客観性と普遍性を重視した借用語の分類基準を提示することを第一の目的とし、借用語の借用過程のみならず、定着してからの変化に焦点を当て、借用語の形成から現代語への継承を通時的に考察し借用語の意味変化の様相を明らかにすることを第二の目的とし、中国語の日本語借用語について社会科学用語を例に考察した。

第1章では、中国語の借用語を見る視点について論じた。借用を言語接触を契機とする言語変化の要因のひとつとみなし、言語間の借用においては、語彙の借用と構造的特徴の借用の二種類があることを確認した。そのうえで、本論文が対象とするのは、語彙の借用の結果である借用語であるとした。次に、先行研究の借用語の分類基準では、語の出自によるものと借用する言語要素によるもの、あるいは自言語の語構成によるものなど、それぞれ異なった基準でもってひとつの言語現象、すなわち借用による言語変化を説明しようとしているために、分類項目の乱立という混乱を招いていることを確認した。そのうえで、一般言語学における借用の理論を確認し、それがどこまで中国語に適用可能であるか検証した。Haugen (1950;1953) の借用の理論を中国語に適用すると、おおむね中国語の借用語にも対応することがわかったが、問題点もあることがわかった。本論文では、言語変化の要因となる、言語接触を契機とする他言語からの意味の取り込みを借用とみなし、その借用の結果として変化した既存語あるいは新たに形成された新語を借用語の範疇に入れることとした。

第2章では、中国語における日本語の借用について論じた。まず現代中国語における日本語借用語の語数調査を実施した。この語数調査により、出自の調査が進むことにより、これまでの定説が覆されうるという点、あるいは借用語の定義によって、借用語判定される数が変わってくるという問題点を指摘した。漢字と漢語の特質については、中国語の漢字は形態素音節文字であるとの立場から、漢字に含まれる言語要素と漢語の内包する統語法について確認した。日本語が中国語から借用した言語要素、中国語が日本語から借用する言語要素は何かを考察した。日本語借用語の歴史的背景を確認したうえで、中国語における日本語借用語を改めて一般言語学の視点からとらえなおした。次に、中国語における借用語の分類基準を再考し、第1章で検討した一般的な借用語分類を中国語の借用語の特質を考慮して再構成した。これにより、時代やモデルとなる言語を限定しない借用語の分類基準を設定することができた。ただし、時代を限定しないとしても、既存語彙か否か、意味拡張がどこで発生したかという判断のために、出自を検証する必要性がなおあることを指摘し、依然として

きわめて重要であるという認識に至った。

第3章では、中国語の社会科学用語の成立背景について論じた。まず、社会科学とは、現代の中国、日本ともに、社会現象を対象とする研究分野であり、政治学、法律学、経済学を中心とした諸学問の総称である。その社会科学の概念は、17世紀から18世紀のフランスの啓蒙主義思想に淵源を求めることができる。社会科学という用語も、フランス語から英語やドイツ語などに広まっていった。その社会科学という用語が、日本語と中国語へどのように受け入れられたか。「社会科学」の用語の形成を検証し、時代背景を考察した。そのうえで、社会科学用語を政治学・法律学・経済学を代表とする社会科学の分野で使われる用語のことで定義した。そして、社会科学用語を論じるにあたり、注意すべき特徴を三点挙げた。第一に社会科学という学問の連続性、第二に社会科学の下位分類にある諸学問の関連性、第三に社会科学用語における対訳資料の重要性である。これらの注意点をふまえ、第4章以降の具体的事例の分析を実施することとした。

第4章では、米国憲法の初期の中国語翻訳語を対象とし、その翻訳語を日本語と比較しつつ考察した。まず言語接触の経緯の記述として、漢訳洋書に記載された内容、蘭学の地理書による知識、転換点としての《海國圖志》、その後の文献の内容を時系列で論じた。この前提と米国憲法の翻訳文の比較を通じ、言語接触を介した知識と語彙の取り込みの史的背景を明らかにした。米国憲法の翻訳語を借用の視点から見るために、英語から日本語へ翻訳され、さらに中国語へ翻訳されるという流れのなかで、中国語翻訳者の属性によって四つのケースを想定した。第一のケースは欧米言語の原文を意識せずに日本語から翻訳するケース、第二のケースは欧米言語の原文を意識して日本語から翻訳するケース、第三のケースは欧米言語の原文を直接中国語へ翻訳するにあたり、日本語の翻訳文あるいは翻訳語を参照するケース、第四のケースは欧米言語の原文を直接中国語へ翻訳するにあたり、日本語の翻訳文あるいは翻訳語を全く参照しないケースである。これら四つのケースについて借用語形成への影響を論じた。日本語で西洋言語の語彙を取り込むにあたり、漢文語彙を意味拡張させる場合、中国語がその漢文語彙を同様に意味拡張させるには、四つのケースにおいて、類義拡張の過程が異なることを指摘した。

第5章では、“手續”の借用と意味変化について論じた。“手續”は1901年から、譯書彙編社に参加した清国人留学生らによって広められた。その当時の日本語の「手續」には、「方法、手順」と「一定の目的を達するために経過すべき処置」の二つの意味があったが、主に後者の「一定の目的を達するために経過すべき処置」の意味を取り込むために、“手續”という日本語の語形そのまま中国語に借用された。1906年以降は中国語話者による“手續”の使用が確認できたが、1910年にもまだ注釈つきで使われた例があり、借用語として普及するにはまだ時間を要した。1915年以降に“手續”の使用が増加したことを確認したが、一方で意味の近い“程序”という用語も使われるようになっていた。“程序”は、清朝末期に新たな近代的法制を構築するにあたって、日本の法案を翻訳した際に形成された新

語で、1910 年の官報的な雑誌に掲載された用例が初出である。それまでは日本の法律条文の翻訳、あるいは日本の法学文献の翻訳するときに「手續」をそのままの語形で借用したのであったが、清国で自発的に法律を起草するときには日本語の用語を改めようとしたのである。種本とした日本の法律条文の「手續」をそのままの語形では取り込まず、“程序”として中国語の法律条文に反映したということが資料から明らかになった。借用過程から見ると、“手續”は「手續」の形を意味とともに中国語へ取り込んだもので、発音は中国語の音素により中国語の漢字音で発音するため、本論文で提示した新たな分類基準によると形移入語にあたる。“程序”は、「手續」の意味を取り込むために、既存語彙にない語構成の漢語を新たに創造した。“程序”の場合は音形ともにモデルの形式を模倣していないが、日本語「手續」との言語接触に起因する新語の形成に相当するため、接触創造語であることがわかった。中国語体系内の意味変化の観点から見ると、新たに登場した法律用語として形成された“程序”の影響により、“手續”は法律用語としての用例を減少させていった。代わりに法律用語としては“程序”のほうがより多く使われるようになっていった。一方で、“手續”は法律用語に限らない一般的に「一定の目的を達するために経過すべき処置」という意味で使われ始めた。現代中国語においても、“手續”は一般的に分野を問わず使えるが、“程序”は比較的法律分野での使用が多く見られる。

第 6 章では、1930 年以降日本語で流行語となり中国語へ借用された“赤字”について、新聞データベースによる用例調査と 1930 年代の雑誌記事をもとに検証した。新語辞書に掲載されるには新聞記事の初出よりは数年遅れていることがわかった。日本語における「赤字」の由来を論じたのちに、中国語における借用過程を検証した。中国語で「赤字」を借用する際に、“赤字”という日本語の語形そのまま借用するか、“紅字”という語形で借用するかの二つの用例が見られた。借用過程から見ると、“赤字”は既存語彙であり、モデルとなる日本語の「赤字」と同形であることから、代用拡張語である。“紅字”は、日本語の「赤」を“紅”と翻訳したために代用翻訳語であるとする見方と、“紅字”は既存語彙であるため、既存語彙の意味拡張としての代用拡張語であるとする見方の二通りが考えられたが、形態素の組み合わせと配列を新規に借用したわけではないため、代用拡張語であると結論づけた。

“赤字”の中国語体系内における意味変化については、意味変化の分類として、特殊化、意味拡張、意味転換の三種があることを確認し、“赤字”が国家レベルの収支決算にのみ使われるようになることは特殊化であり、一般的な好ましくない差の増加という意味で使われるようになることは意味拡張であると述べた。

最後に終章において、本論文を総括するとともに、今後の課題として意味の取り込みをともしない形のみ模倣の考察を進めることと、借用語の定着後の意味変化の考察対象を拡大することについて述べた。